

今、外国語学部に求められているものは何か - 学部学生へのアンケートおよびシンポジウムから -

堀坂浩太郎

はじめに

学生諸君はどのような期待をもって入学し、どのように評価して卒業していくのであろうか。このような関心から、外国語学部では1998年春に、新入生（98年度）および卒業時の学生（97年度）を対象にアンケート調査を実施した。その集計結果を材料に同年6月17日、「今、外国語学部に求められているものは何か」とのタイトルで、教員、学生によるシンポジウムを行った。本稿はそのアンケート結果とシンポジウムにおける発言をとりまとめたものである。

大学における自己点検・自己評価の必要性が言われる昨今、その一環として学生による「評価」の是非がしばしば話題に上ってくる。アンケートとシンポジウムを組み合わせた今回の試みもそのひとつのあり方であり、数字に表れた期待や評価、あるいはシンポジウムでの発言に目を向け耳をかたむける必要があるように思われる。

アンケート調査は、新入生に対してはオリエンテーション後の4月15日、「外国研究入門」の授業中に実施した。入試時における選択の理由や大学での勉学・生活において重視する点、講義への期待、卒業後の進路予測等を聞いた。いわば外国語学部への「入口調査」ということができ、96年春に引き続き2度目の実施である。卒業時の学生に対しては初めての調査で、3月25日の学位授与式後の学科集会で行った。各教科における学生自身の勉学姿勢と達成度、各教科および交友・教員との関係・課外活動等の満足度、それに進路を聞いた。外国語学部における「出口調査」と言ってよいであろう。（調査の概要は表1を参照）

シンポジウムでは集計結果をグラフにして表示したが、本稿では紙数の関係で表（表2および表3）の形で掲載する。数値はいずれもパーセンテージである。なお本報告では紙数の関係で割愛せざるを得ないが、記述式の意見表明が特に卒業時の調査で多数かつ多面に上った点も、学生の大学

への関心の高さを示すものとして特記しておきたい。

表 1 調査対象数

	新入生調査（入口調査）	卒業時調査（出口調査）
回答数	男性110、女性323	男性78、女性232
回答率（在籍者数比）	男性85.9%、女性91.8%	男性68.4%、女性74.8%

新入生「入口調査」（表2「新入生へのアンケート」を参照）

1）上智大学への志望（問1．あなたにとって上智大学の入学は）

学部全体で男女合わせて72%が上智大学を「第1志望」とし、さらに同25%が第1志望ではなかったが、「希望度の高い大学」と回答している。男女を比べてみると「第1志望」「希望度の高い大学」合わせて97%と同率だが、想定されたとおり女子の方が「第1志望」と回答した比率が高く、その差は5ポイントである。前年（97年）の調査と比べると、女子の「第1志望」度が若干さがっている。

2）受験情報（問2．上智大学の受験決定に際して最も影響した情報源は何でしたか）

大学案内、キャンパス訪問、インターネット、進学案内等「上智大学提供の情報」が37%とトップで、これに「本学在校生の意見」も加えると45%となる。大学提供の情報が進路を決めるうえでいかに重要な要素となっているかを、如実に示す結果となった。2番目に重視された情報源は「高校・予備校の指導」で19%、ついで「偏差値や入試難易度などを記載した大学案内誌」の15%である。前年と比べると「高校・予備校の指導」（6ポイント減）や「大学案内誌」（2ポイント減）が低下し、「上智提供の情報」の重要性が増しており（3ポイント増）改めて広報の重要性を確認するデータである。

ただ男女間の違いをみると、女性が「上智提供の情報」を圧倒的に重視しているのに対し、男性は「上智提供の情報」と「大学案内誌」の差が極めて小さい。この違いは前年も顕著に表れており、広報に当たってはこうした点も配慮する必要がある。

3）学部の選択（問3．「外国語学部」を選択するに当たって最も評価した点は）

「科目の構成や内容」が74%と圧倒的に高く、しかも前年よりも6ポイ

ント上昇した。ついで「世間の評価」が14%である。これに対して「教授陣」が4%（前年は9%）、「設備」「交友関係」は各2%（前年はそれぞれ5%、2%）と極めて低い。

こうした全般の傾向のなかでも、女性が「科目の構成や内容」をより重視（男性57%、女性79%）しているのに対し、男性は「世間の評価」が女性よりも高く（各20%、11%）、より就職を意識している結果だと思われる。

4) 学生生活（問6．今後の大学生活で最も重視したい事柄は）

性差が最も強く表れた質問項目であった。男性が「学部・学科が提供する科目の学習」（以下「学習」34%）「何でもよいから自分の関心を持てるものを見つけて育てていく」（「関心分野の育成」26%）「クラブ活動や交友を通じての人間関係の形成」（「課外活動などによる人間形成」23%）の順で重視していた。これに対し女性は「関心分野の育成」（41%）

「学習」（25%）「課外活動などによる人間形成」（17%）の順である。ただ男性の場合は前年の順位と変わっており、流動性の高い質問項目といった側面があるかもしれない。

数値にすればわずか（8% 12%）だが、前年と比べて「将来の就職を考えてそれに備えた実力づくり」が増えている点は、3) 学部の選択における「世間の評価」の上昇とも考え合わせて注目される。

5) 勉学の重点分野（問4．あなたにとって「外国語学部」での勉学の主たる狙いは）

「地域研究」がトップで41%で、この率は男女ともほぼ同じである。ついで「語学」26%、「副専攻」19%、「広い教養」11%とつづく。この順番とウエイトは前年も概ね同じである。なお1年次の調査では、各学科がもつ「言語研究科目」については、語学習得との区別が十分につかないと思われるので質問をしていない。

6) 講義への期待（問7．大学の講義内容で最も期待するものは）

講義内容としてどのような性格のものを期待しているかとの質問に対しては、「実用的、実践的な知識」がトップで44%である。ついで「幅広い知識」が37%で、「学問的に専門性の高い内容」は16%と低い。

7) 所属学科の満足度（問5．あなたが所属する学科の学生であることへの現時点での満足度を a b c d e の5段階で評価すると）

満足度が最も高い「a」と次の「b」の合計で78%であり、帰属意識はかなり高いとみてよいのではないか。普通に当たる「c」は18%、「d」「e」は各2%に過ぎない。

8) 卒業後の進路(問8. 卒業後の進路について)

卒業後の進路が「未定」と答えたものは昨年と同じ22%で、8割近い学生が漠然としたものにしろ何らかの目標をもっていると考えられる。この段階での進路として想定されているもののトップは「国際機関職員・外交官」で24%であり、これまでの本学部における卒業生の進路や後述の卒業時の調査結果とは大きな乖離がある。ついで「マスコミ」と「大学院への進学」がともに11%である。「民間企業」と回答した者はこの段階では9%と少ない。

卒業時の「出口調査」(表3「卒業時のアンケート」を参照)

卒業時の調査では、まず問1で全学共通科目および学科科目のカテゴリーごとに学生が取り組んだ姿勢(「貴方が取り組んだ姿勢」)をa熱心、b前向き、c消極的、d興味がもてなかったの4段階で回答を求めた。そのあと問2で大学生活全般および上記各科目について4段階で満足度をきき、問3で専攻語学、一般外国語、専門知識の3項目について優良不可の4段階で自分の達成度を自己採点してもらった。このほか進路を質問している。以下は集計結果を、学部にとっての関心事項にそってまとめた。

1) 大学生活における満足度

「大学生活全般」について満足度を聞いたところ47.7%が「大変満足」、46.5%が「満足」と回答し、「あまり満足できず」「満足できず」は合わせて4.8%と少なかった。ただ大学生活を内容別にみると、「交友関係」「課外活動」で「大変満足」が多く満足度が高いのに対し、「勉強」「教師との関係」では「大変満足」よりも「満足」の方が格段に比率が高くなり、満足度にも濃淡が顕著に表れている。この傾向は特に男子にはっきりとみられ、「勉強」において30.8%が、また「教師との関係」においても同28.2%が「あまり満足できず」「満足できず」と答えている。

2) 全学共通科目における取り組み、満足度および自己採点

人間学、外国語科目、保健体育、全学選択科目からなる全学共通科目への学生の「取り組み」は、後述する学科科目に比べて明らかに低いとの結

果が出ている。いずれも「前向き」の比率が最も高いものの、「熱心」よりも「消極的」が多く、人間学および保健体育については「興味をもてず」がそれぞれ1割を超している。

この傾向は満足度にも如実に反映しており、「満足」が比率としては最大だが、全般に「あまり満足できず」に振れている。特に外国語科目の場合には、「取り組み」と満足度の間に差がみられる。さらに外国語科目（一般外国語）については学生に自分の達成度を答えてもらったが、それによると「可」が40.6%で一番多く、ついで「良」が35.5%、「不可」が11.0%の順で、「優」はわずかに10.6%に過ぎなかった。日ごろ言われている一般外国語教育への不満の一端が、こうしたデータにも顕著に現われたといえる。

3) 学科科目における取り組み、満足度および自己採点

学科科目への「取り組み」は、「専攻語学」が「熱心」「前向き」の合計で85.1%、「地域研究科目」同76.8%、「副専攻科目」同62.9%、各学科提供の「言語研究科目」同62.9%となっており、全般に積極的な勉学姿勢がみられる。満足度は「大変満足」「満足」の合計で「専攻語学」が77.1%、「地域研究科目」同74.2%、「副専攻科目」同75.1%と概ね3分の2の学生が満足だったとしている。ただ各学科提供の「言語研究科目」は同66.1%に留まったが、「言語研究科目」の分類・用語が学生にとって比較的新しくなじみが少ない点も考慮しておかなければならない。

「専攻語学」および「専門知識」という形で学生に自分の達成度を自己採点してもらったところ、優良不可の分布は専攻語学で19.4%、45.5%、31.0%、3.5%であり、専門知識では11.9%、47.1%、32.6%、6.1%であった。両方とも「良」が多いものの、全体としては「可」へ大きく振れており、自己採点は厳しいものがある。この傾向は一般外国語でも現れていた。

ここでは6学科全体でみたが、学科別にみるとかなりのぶれがみられる点も指摘しておきたい。学科によってカリキュラム編成や卒業に要する科目、教員の専門構成が違うことなどによると思われるが、学生のニーズ変化への対応度の違いにもよろう。

4) 主として履修した副専攻科目

本調査では、「主として履修した副専攻科目」を聞いた。全体で32.9%

が「なし」ないしは「無回答」で特定した副専攻を履修していない。「主として履修した副専攻」をもっている学生の比率をみると、男性は言語学、国際関係、アジア文化がほぼ同じ（各21.8%、23.1%、24.4%）である。これに対し女性は15.9%、24.6%、25.9%で、言語については女性よりも男性の方が比率が高い点が注目された。

英語学科は副専攻を専門科目化しているためほぼ平均しているが、副専攻の履修は学科によってばらつき多い。例えばポルトガル語学科はアジア文化が41.7%を占め、イスパニア語、ロシア語学科は国際関係・アジア文化が多い。フランス語、ドイツ語学科は言語学が比較的高い。

5) 卒業後の進路

1998年春に卒業した学生の進路だが、最も多いのはいわゆる民間企業に属する部分で、男女合わせて「メーカー」が22.9%でトップである（この質問への回答者総数277人）。「銀行」「その他金融機関」が各6.5%、6.9%、「商社」9.8%、「運輸」4.4%、「小売業」3.3%である。「報道」も4.7%いたが、「教員」「公務員」は各1.8%、1.1%と極めて少ない。

大学院への進学は国内が5.5%、海外が2.2%である。また民間企業のうち「外資系民間企業」と答えた者が8.7%いた。

表2 新入生へのアンケート（入口調査）- 98、97年春

	男女合計		男 性		女 性	
	98年	97年	98年	97年	98年	97年
問1. 上智への入学志望度は						
a. 第1志望	72%	75%	68%	68%	73%	79%
b. 希望度の高い志望校	25%	23%	29%	34%	24%	19%
c. 希望に反した入学	3%	2%	3%	3%	3%	2%
問2. 受験への影響情報源は						
a. 高校・予備校の指導	19%	25%	17%	30%	20%	23%
b. 大学案内誌	15%	17%	25%	29%	11%	12%
c. 上智の提供情報	37%	34%	22%	19%	42%	40%
d. 上智在校生の意見	8%	8%	5%	4%	9%	10%
e. 両親の意見	8%	4%	4%	2%	9%	5%
f. 友人の意見	3%	2%	6%	3%	1%	2%
g. マスコミ	2%	3%	4%	5%	1%	2%
h. その他	9%	7%	16%	9%	6%	6%

今、外国語学部に求められているものは何か 7

	男女合計		男 性		女 性	
	98年	97年	98年	97年	98年	97年
問3. 外国語学部選択の評価点は						
a. 科目の構成や内容	74%	68%	57%	59%	79%	72%
b. 教授陣	4%	9%	8%	9%	3%	9%
c. 設備	2%	5%	2%	8%	2%	4%
d. 交友関係	2%	2%	5%	2%	1%	2%
e. 世間の評価	14%	12%	20%	16%	11%	10%
f. その他	5%	5%	8%	7%	4%	4%
問4. 当学部での勉学の重点は						
a. 語学	26%	25%	27%	30%	26%	22%
b. 地域研究	41%	45%	42%	38%	41%	48%
c. 副専攻	19%	18%	10%	15%	23%	19%
d. 広い教養	11%	12%	17%	17%	9%	10%
e. その他	2%	1%	4%	0%	2%	1%
問5. 自学科所属への満足度は						
a 段階（高い）	43%	44%	44%	38%	43%	47%
b 段階	35%	37%	29%	31%	37%	39%
c 段階	18%	14%	20%	24%	17%	11%
d 段階	2%	4%	2%	5%	2%	4%
e 段階（低い）	2%	1%	5%	2%	1%	0%
問6. 大学生活で重視したい点は						
a. 学習	27%	26%	34%	22%	25%	27%
b. 課外活動などによる人間形成	19%	22%	23%	29%	17%	19%
c. 関心分野の育成	37%	40%	26%	33%	41%	43%
d. 就職に備えた実力づくり	12%	8%	10%	9%	13%	7%
e. 好きなこととして過ごす	2%	2%	3%	3%	2%	1%
f. その他	3%	3%	5%	4%	2%	3%
問7. 講義に最も期待する点は						
a. 幅広い知識	37%	35%	42%	32%	36%	37%
b. 学問的に専門性の高い内容	16%	19%	13%	22%	17%	18%
c. 実用・実践的な知識	44%	44%	45%	43%	44%	44%
d. その他	3%	2%	1%	2%	3%	2%
問8. 卒業後の進路						
a. 未定	22%	22%				
漠然とした希望も含め						
b. 大学院への進学	11%	7%				
c. 教員	2%	3%				
d. 国際機関・外交官	24%	22%				
e. 公務員	2%	*				
f. 民間企業	9%	12%				
g. マスコミ	11%	10%				
h. N G O	3%	3%				
i. その他	15%	10%				
希望はあるが進路先不明		10%				

注：*は1%以下。各問の合計が四捨五入の関係で100%とならないものがある。

8 堀坂浩太郎

表3 卒業時のアンケート(出口調査) - 98年春

大学生生活の満足度(%)	大変満足	満足	あまり満足できず	満足できず	無回答
大学生生活全般	47.7	46.5	4.5	0.3	1.0
課外活動	38.4	34.8	20.6	4.8	1.3
交友関係	50.3	41.3	7.7	0.3	0.3
教師との関係	17.4	55.8	21.0	2.3	3.5
勉強	16.8	61.3	19.0	2.3	0.6

大学生生活の満足度 - 男性(%)	大変満足	満足	あまり満足できず	満足できず	無回答
大学生生活全般	28.2	64.1	6.4	1.3	0
課外活動	35.9	34.6	21.8	7.7	0
交友関係	34.6	47.4	17.9	0	0
教師との関係	16.7	53.8	24.4	3.8	1.3
勉強	16.7	51.3	24.4	6.4	1.3

大学生生活の満足度 - 女性(%)	大変満足	満足	あまり満足できず	満足できず	無回答
大学生生活全般	54.3	40.5	3.9	0	1.3
課外活動	39.2	34.9	20.3	3.9	1.7
交友関係	55.6	39.2	4.3	0.4	0.4
教師との関係	17.7	56.5	19.8	1.7	4.3
勉強	16.8	64.7	17.2	0.9	0.4

全学共通科目の取り組み(%)	熱心	前向き	消極的	興味持てず	無回答
人間学	11.9	38.7	32.6	15.8	1.0
保健体育	13.9	37.7	35.5	12.3	0.6
外国語科目	21.6	48.1	25.8	4.2	0.3
全学選択科目	12.6	56.5	24.8	4.8	1.3

全学共通科目の満足度(%)	大変満足	満足	あまり満足できず	満足できず	無回答
人間学	9.7	43.5	31.3	11.3	4.2
保健体育	7.4	46.1	37.4	6.8	2.3
外国語科目	12.9	48.1	32.9	4.8	1.3
全学選択科目	9.0	55.8	28.7	2.9	3.5

学科科目の取り組み(%)	熱心	前向き	消極的	興味持てず	無回答
専攻語学	34.8	50.3	13.5	1.3	0
言語研究科目	15.8	47.1	24.5	11.6	1.0
地域研究科目	22.9	53.9	18.4	3.9	1.0
副専攻科目	22.6	40.3	15.2	3.2	18.7

学科科目の満足度(%)	大変満足	満足	あまり満足できず	満足できず	無回答
専攻語学	22.3	54.8	20.3	1.6	1.0
言語研究科目	11.3	54.8	27.1	3.5	3.2
地域研究科目	19.4	54.8	22.9	1.3	1.6
副専攻科目	20.3	54.8	15.5	1.9	7.4

自己採点(%)	優	良	可	不可	無回答
専攻語学	19.4	45.5	31.0	3.5	0.6
一般外国語	10.6	35.5	40.6	11.0	2.3
専門知識	11.9	47.1	32.6	6.1	2.3

シンポジウム

パネリスト

泉邦寿 フランス語学科教授、言語学副専攻主任 / フランス語学

井上久美 英語学科助教授 / 通訳・アメリカ研究

河崎健 ドイツ語学科専任講師 / 政治学

萱忠義 大学院生・外国語学研究科言語学専攻 / 英語学科卒

小田康之 大学院生・外国語学研究科地域研究専攻 / イスパニア語学科
卒

清水葉津紀 学部3年次生 / ロシア語学科

清水康之 学部4年次生 / ポルトガル語学科

司会

堀坂浩太郎 ポルトガル語学科教授 / ラテンアメリカ地域研究

* 肩書きはシンポジウム実施当時である。

以下は、シンポジウムにおける出席者の発言要旨である。

清水（康）：今回の調査結果から、まず教員と学生の関係がかなり良好であるというのが見て取れるが、それは私も実感しているところだ。私が所属している学科でのことだが、教員と学生間のコミュニケーションはかなりよく取れている。外国語学部を志望する学生はそもそも人とのコミュニケーションが好きだという事情が働いていることにもよると思われるが、いずれにしろコミュニケーションが取れていることは素晴らしいことで、学習上でもかなり有利な点だと言える。

コミュニケーションとは逆に「一般外国語の達成度」はかなり低い結果が出ている。学生による自己判断によるものだが、学科生の意見を聞いてみたところ、週1回、多くて2回といった英語の授業に不満を持っており、もう少し高いレベルの授業を要求している。

専攻語学の達成度について、卒業時の310人中201人が「優」か「良」と、また専門知識の達成度については183人が「優」または「良」の自己採点をしているが、正直なところこんな自信はもてない気がする。確かに授業に出て勉強はしたが、それが実力となっているかと聞かれると何とも回答のしようがない、というのが大方の学生の感触ではないか。

私は去年、ツバロン製鉄という日本とブラジル合併の製鉄所で1年間研修留学生として生活し、夜間、大学で聴講した。ブラジルの大学進学率は日本と比べて低い、逆に学生の目的意識がかなり高かったのが印象的だった。例えば法学部に所属している学生は、かなりの割合で法律家や弁護士になることを目指していたし、心理学部にいる学生は何らかの形で心理学に関わって生活していこうとの人生設計を持っていた。

ブラジル人にとって「外国語学部」が聞き慣れない学部名だったせいか、「自分は外国語学部で勉強している」と自己紹介すると「将来先生になるのか、それとも通訳になるのか」との質問が帰ってくるのがしばしばであった。それまで3年間、外国語学部で勉強してきたわけだが、改めて「外国語学部で勉強するに当たって何を目標せばよいのか」を考えさせられた。こうした問いは、実は、就職活動をしている4年生の悩みでもある。大学で学んだ知識をどういった分野で生かせばよいのか、必ずしもはっきりしていないような気がする。

専攻語学および専門知識の達成度は結局のところ、実際に異文化コミュニケーションの場に出た時に実力がどの程度発揮できるかにあると思う。新入生の調査結果には、就職のための実力作りや地域研究、語学に重点を置きたいとの期待があらわれていたが、結局、地域研究や語学は異文化コミュニケーションの一つの武器または手段であって、実際には社会に出て実力が推し量られるわけで、そういった観点から、外国語学部のあるべき姿というのが見えてくるのではないかと思う。

清水(葉)：私は語学を始めてまだ二年ちょっとで、何か得たものをお話しする段階にはないので、ロシア語学科で学んでいる感想を中心に述べたいと思う。

私が受験した年の上智大学を扱った「赤本」には、「鬼のロシア、地獄のイスパ」という言葉が載っており、ロシア語学科は大量に留年させる学科だと解説されていた。入ってみて留年する人が本当に大勢いることがわかったが、その理由のひとつはロシア語があまりなじみのない、日常生活でも触れる機会の少ない言語であることに起因しているように思われる。「Rを裏返しに書く文字がある」程度の認識で入学するわけだが、それではどうしてロシア語をやりたいかとなると、ロシアの音楽とか文学とか政治とかいった地域研究に興味がある者が多く、ロシア関係のことを学べる

数少ない大学のひとつとして受験生に選択されているといえる。

こうした学生の意図に反してカリキュラムの方は、1、2年に取れるのは語学系の必修科目か、講読、通訳法などという語学に付随する選択必修科目がほとんどで、それをクリアしないことには3、4年の地域研究科目に進めない。1、2年にも「ロシア文化入門」や「ロシア地域研究入門」、「ロシア地域研究方法論」という地域研究系の科目があるが、語学の膨大な課題に押されて学生の受講態度は受動的なものになってしまう傾向がみられる。入試の時のことだが、二次試験の終了時に学科の先生から「ロシア語学科は厳しいから、やる気がない人はここで諦めて帰りなさい」と言われたことを実感している。

例えていえば、ロシア語には6種類の格変化と、性と数の4種類の変化がある。この組み合わせで24種類の語尾変化になる。それを1年時に徹底的にたたき込まれるわけだが、地域研究などを目指している学生にとっては、それはもう苦痛以外の何物でもない。ただそれをやらないことには、次のステップには進めないカリキュラムになっている。

学生の方の問題点としては、私自身もそうだが、語学学習の心構えがあまりないままに入ってきている。上智の外国語学部というと「国際的でかっこいい」とか「国際的な仕事に結びつきやすい」といったイメージで選択し、外国語を学ぶということが具体的にはどのようなことなのか、といったところまでは考えないで選択している。語学の第1段階は単純な反復作業だという自覚を持って入ってきていないので、苦痛となりドロップアウトしてしまう学生がかなりの数出てしまう。

地域研究と外国語学習のバランスを考えた場合、確かに最初の段階で文法の基礎をみっちりやってから地域研究の方に視野を広げていくというのは正しいことなのだが、1、2年の基礎段階で興味を失ってしまう学生も一方にはいる点に着目する必要があるのではないか。語学科と文学科をもつ英語やフランス語などとは違い、学科の選択の幅が狭いロシア語の場合には、できれば言語を専門にしたい学生と地域研究を専門にしたい学生のカリキュラムは少し分けるなどの工夫をすると、地域研究に興味のある人でもドロップアウトしないのではないかと思われる。

アンケート結果についてだが、卒業時の学生による学習結果の自己採点で「可」の評価が多かったが、私の印象では外国語学部というのは学科に

限らず語学の課題がいっぱい出るため、それを毎日こなしていくことによって「こなした」という感じが強いのではないか。だから「学んだ」とか「何かを得た」というよりも「与えられたものをこなした」という印象が強く残る形となって表れ、「不可」になるほど何にもしていないわけではないが、さりとて「良」や「優」をつけられるほど自分から能動的に何かをしているわけではない、といった評価ではないかと思う。全体的に外国語学部は受動的な学習が多いという印象を持っている。

萱：私は現在、大学院の言語学コースに所属しているが、今から2年前に英語学科を卒業した。まず最初に英語学科について自分の思ってきたことを述べたいと思う。

ロシア語学科とは対照的に、英語学科の場合には、入学時にはすでに英語に関しては基本的なことはもう勉強してきているわけで、どちらかといえば地域研究など他の分野、例えば副専攻に時間をかけることができる。しかしその一方で、副専攻などを取らなくても卒業できるわけで、言語を基礎から学ぶ必要はないし、地域研究も副専攻もあまりなくて、何となく与えられた課題をやっているうちに卒業してしまう学生もかなりいる。本当に悲しいことだといえる。

調査結果を見ると、卒業生の5分の1は副専攻に真剣に取り組んでいない。「語学プラス」の部分は一切勉強せずに語学だけ学びに来ているのだとしたら英語の専門学校と変わらないわけで、大学にいったい何をしに来ているのかという疑問がわいてくる。外国語学部としては、言語以外のプラスをきちんと勉学させ、卒業論文等で4年間の成果を出させる工夫をする必要がある。

教員と学生の関係が近いという発言があったが、僕の印象ではあまり近いようには思えない。経済学部や法学部であれば、3、4年生になるとゼミで先生、さらには先輩後輩が一緒になって勉強する場があるが、外国語学部ではゼミの数は限られており、ほとんどの学生はゼミに所属していない。語学学習の段階では、教員とのふれ合いはあるが、その後は薄れてしまう。語学についてもクラスの規模が20人程度、場合によっては40人前後のものもあり、そうなる先生との関係はかなり薄いのが実態ではないか。

大学での生活に関する質問で、卒業時の学生のおよそ50%が「大変満足

している」と回答しているが、その一方で教員との関係にはあまり満足していない。また勉強への満足度も「大変満足」は15%程度しかない。これに対して交友関係については大学生活全般の満足度とほぼ同じく「大変満足」が50%に達している。学生は大学に何を求めてきているのかといった疑問が生まれてくる。これらの数値を見る限り、大学には勉強とか教員との関係とかを求めているのではなくて、友達を作る場とか、何か自分がしたいことをする場とか、要するに課外活動をする場というような受け止め方をしていることが読み取れる。

会場には高校生の姿もみられるが、受験勉強で頑張り疲れ切って入学したのだから、とりあえず遊ぼうという気持ちが働いても不思議ではないが、それは大学に対して学生が求めるものとしては少し違うような気がする。

小田：正直言って、卒業時点ではほとんどの学生が満足をし、多くの人が自分はよくやったと褒めてニコニコしながら“スーパーマン”となって出ていく、というまるで外国語学部の宣伝のような、やらせのような素晴らしい結果だな、というのが調査結果の第一印象だ。具体的な指摘をする前に、どのような観点から話をするかを明らかにするために、自分の経歴をごく簡単に紹介すると、私は10年ほど前にイスパニア語学科に入学し、在学中にスペインに留学、卒業後は総合商社の三井物産で3年間勤務した。三井物産では鉱山機械のラテンアメリカ向け輸出などに携わったのち、昨年4月、新設された大学院の地域研究専攻に入学して、今はラテンアメリカ地域研究を専攻している。

アンケートのなかで外国語学部での勉学の重点を聞いているが、新入生の41%が「地域研究」と答えている。自分が地域研究専攻だから言うわけではないが、この結果に非常な感銘を覚えた。というのも「外国語学部」という名称からすると、この学部は明らかに外国語を学ぶところとの印象が強いからだ。名称については学部内で幾度となく議論されたと聞いているが、一年生のこの調査結果を見ても、学部の名称が学生のニーズからかけ離れてしまっていることがはっきりしたという思いを強くした。英語の名称はFaculty of Foreign Studiesとなっており、日本語名称についてもせめて「外国研究学部」くらいに変える必要があるのではないか。

つぎに地域研究に関して述べると、今は1年生向けに「外国研究入門」が開講されており「地域研究」とは何たるかのイントロダクションがある

が、私が学部に入學した10年前にはなかった。この点を考えるとかなりの進歩とは思えるが、地域研究の難しさやアンケート結果に表れたニーズの高さを考えると、まだまだ不十分ではないかと思える。

地域研究には、まず「地域」とは何かという大問題があるわけで、しかもその地域をどのようなアプローチで研究すればよいのかという方法論上の問題を抱えている。例えば専門分野(ディシプリン)と地域とどちらに立つべきかとか、あるいは言語習得の問題をどうするかとか、さらには敵国研究や植民地政策として始まった歴史的背景も考えなければいけない。基本的には文化相対主義に立つわけだが、それがどういうことを意味するかも時代とともに考え直す必要がある。こういったことを学部でもう少し徹底的にやる必要があるのではないか。これは地域研究専攻の院生としての願いでもある。

もう一点指摘したいのは、講義に期待する点として新入生調査であげられていた「実用・実践的な知識」に関してである。44%の学生がそれを選んでしたが、企業に3年間勤めた経験から言えることは、大学で学んだことが役に立ったことは全くなかったという点だ。この発言にはもちろん限定が必要で、確かにラテンアメリカとのビジネスにはイスパニア語は役に立ったのだが、それ以外では考えてみても直接的に役に立ったことは思い出せない。

べつに外国語学部を非難して言っているわけではなく、そもそも大学に実用的・実践的な知識を求めること自体に意味があるのか、という疑問が出てくる。私はむしろ外国語学部で行う講義は大学の枠組みにおいてのみ可能なことをすべきではないかと思っている。というのは、いったん社会に出て企業で勤めると、いろいろ利害が絡み、しかもミクロな立場に立たざるを得ない。大学においてこそ、大きく大局的に物事を見る目を養えるからだ。これこそ外国語学部の最も目指すべきポイントではないかと思う。

だからといって実用・実践を無視してよいということではもちろんない。学問の性格上社会の現実から離れては存在し得ないわけで、社会を常に見据えながら、それとの緊張関係を保っていく。そういった外国語学部の講義・授業のあり方が問われていると思う。

井上：調査結果を見、学生諸君の話聞いて、改めて上智大学に興味を

持ち入学した学生の大学への期待が高いことがわかった。喩えていうと、そこに行けば自分の好きなものが買えるだろうと一流デパートに行く客のようなものだ。たしかに上智は一応いろいろ盛りだくさんの品物を揃えているし、売っている人もさほど悪いセンスをしているわけではない。そういう意味ではそれなりに期待に応えていると思う。卒業時のアンケートにも「合わなかった」というような結果は出ていないようだが、私は卒業後6カ月たってからもう1度同様の調査をしてみたら面白いのではないかと思う。

ただ少々危険だなと思ったのは、一流デパートのように好きなものがあるいろいろなバラエティに富んでそろっていることで、逆に選択を難しくしている点だ。1、2年は言語習得で大変かも知れないけれども、3、4年になると、「あれもあるし、これもあるし」といった具合にいろいろ選択の幅が出てくる。他の大学に比べて恵まれている点だが、それを有効に使えるのは、英語でいうところの“provided that ~”、すなわち条件がついているということだ。

それは学生が、どの授業を、何のために、そしてどういうやり方で進めていくのか。つまりWhatとWhyとHowを自分自身で考えメニューを組み立てていくことができるかどうかにかかっている。きちんと問題意識を持ち、社会に出てからのことも考えて、授業を受けることが非常に重要だと思う。

私は慶應大学出身だし、通訳の仕事を通じて外の世界との接触も多い。そういう立場から上智をみると、和気あいあいとしており面倒見がよく学生も躰がよい。教員にとっては教えやすいわけだが、ひとたび外へ出るとそこには上智とは大変異なる異文化社会が待っている。

担当している異文化間コミュニケーションのゼミでずいぶん鍛えたつもりなのだが、就職後1週間、あるいは2週間しかたたないうちに、「先生、飲みに行きましょう」「会いましょう」といった電話がかかって来る。女子も男子もいるが、面白いのは異口同音に「先生、会社っていうのは異文化ですね。外国だけが異文化だけじゃありませんね」と言うことだ。

彼らのもう一つの共通点は、みんなに「君は変だよ」といわれると言うことだ。ゼミなどで出来るだけ発言するようにと教育しているが、そのせいか、会社の研修などでも「質問がないか」と聞かれるとどんどん発言す

ることになり、周りが黙っているのに自分だけ話しているといった状況が生まれてしまう。その結果、「君は変だよ」と言われるというわけだ。

私は「正しいと思ったら発言する」学生を育ててきたと思うし、それが上智大学卒らしいところだと思う。ただ無闇に発言すればよいというものではもちろんない。しっかりとした発言内容をともなったコミュニケーション能力が求められているのであり、そのためには、デパートをひと通り見て回っただけではなく、自分なりに多様な見方とか考え方を育て知識を増やして、自分のコンテンツとして頭の引き出しにしまって社会に出て行くことが必要だ。そのためには喰わず嫌いをやめて、いろんな分野に興味を持ち、メニューを増やす方法がよいのではないかと思う。

コンテンツがあれば、英語で言うところのmake a differenceを恐がってはいけない。ただその場合、つぎに重要となるのはその表明の仕方だ。周りの人に分からないような言い方をしてもしょうがないわけで、聞き手の年代やバックグラウンドを考えて、コミュニケーションのパターンを変えていく必要がある。そうした努力をしたうえで「変だ」と思われても、それはそれでよいのではないかと私は思う。

大学での勉学は即、社会では役に立たないとの発言があったが、物事の考え方とかいろんな見方、判断力といったものは大学で学べるわけで、先生からそういった力を吸収していくことが大事だ。それが実際に社会に出てからの即戦力となり得るといえる。そのような力を身につけるために、自分とは物の見方、考え方が全く違う教員の科目をわざわざ取るといった工夫をしてみてもよい。

私の担当科目に「通訳入門」があるが、同時通訳を目指す特定の学生だけに役立つものでは決してない。会社社会は大学とは異質な社会、異文化社会だが、その中で自分の個性を発揮するには、職場の人たちのinterestをしっかりと見極めた上で、一番よい方法で説得するプレゼンテーションの技術が必要だ。何でもかんでも言いたいことを言えばよいというわけではなく、控えめに言った方がよい場合もあるし、押した方がよい時もある。黙っていて後で根回しした方が得策といったケースも出てくる。私の科目はコミュニケーション能力という面からも役に立つわけで、こうした科目に敢えてチャレンジしてみるといったことをしてみてもよいのではないだろうか。

河崎：現在、ドイツ語とドイツの政治を教えているが、もとはドイツ語学科の出身であるので、その当手を振り返りながらまずドイツ語学科について触れたい。

ドイツ語学科も昔は語学をやっていたらよいという雰囲気があった。語学の授業は大変厳しいもので、特に神父さんの授業は遅刻してくるとドアに鍵をかけてしまって入れてくれないほどだった。が、授業後の充実感はずばらしいものがあった。そうこうするうちに、ドイツの経済や政治といった地域研究に興味を持つ学生が増えてきたわけで、特に欧州統合はその傾向を一段と強める要因となっている。

そこで重要になるのが語学教育と地域研究の関係だ。語学についていえば、就職に役立つかどうかといったことに左右されないで、もう少し長いスパンで一生涯付き合い合えるような外国語ということで考えたらどうか。社会に出てからの武器ということでは、ドイツ語人口は一億人以上だが英語に比べれば格段に少ない。ドイツ系企業に勤めれば使う機会は増えるが企業数は多くない。とって就職後の有用性を一般化するのには、実はかなり困難なことだ。

例えば私の同級生のなかにも、在学中の成績はよくなかったのだが、手紙の翻訳を指示されたのがきっかけで、いつの間にかドイツ語を使わざるを得ないはめになったケースもある。本人は「学生時代より勉強したよ」なんて言っていたが、ことほど左様に社会に出てから言語がどのように役立つかは即断できない。降って湧いたようにある日突然必要になる場合もあり、一生付き合い合っていていくといった心構えが必要だ。教員としてもそういった語学教育ができれば本望だ。

つぎに地域研究だが、「地域研究とは何たるか」の定義が難しいというに学科によって扱い方が違うといった点もある。誤解を恐れずに言えば、イスパニア語学科やポルトガル語学科では地域に関する研究が、はじめから「地域研究」として位置づけられていたのに対し、ドイツ語学科やフランス語学科、英語学科では、ディシプリンの一部に組み込まれて始まった。例えば私の専門はドイツ政治だが、大学院コースにドイツ地域研究科というのはなく、政治学科に在籍し、その中でドイツ政治を勉強することになる。当然のことだが、アリストテレスやプラトンから始まることになる。ドイツに関する研究が、哲学、政治学、法学といった学問分野に分化され

てしまってきたともいえる。

ところが今、地域研究に求められているのは、ドイツ研究の一環としてドイツ政治を研究することで、アリストテレスやプラトンから始めなくても、そんな時間があつたらむしろドイツ経済とかドイツに関する他のことを学んだ方がよい、むしろその方が有用だといった議論にもなってくる。外国語学部における「地域研究」の試みは、個別の学問体系のなかで進めてきたものをインターディシプリンな形で再編成しようというもので、最初から地域研究が意識してきた学科と比べて難しいところがある。もっともドイツ関係の学会にもそういった動きが全くないわけではなくて、「日本ドイツ学会」などはインターディシプリンを柱のひとつにしている。

最後にアンケートについてだが、一番ショックだったのは卒業アンケートで教師との関係に「大変満足」と答えたのが17.4%しかいなかった点だ。萱さんはゼミへの参加が低い点を指摘されたが、いわゆるマンモス大学に比べると、外国語学部は小さなクラス編成で教員と話す機会も多いわけで、高校みたいな雰囲気だと思っていた。教員側の問題でもあるが、学生の方からももっと積極的に先生にアプローチをすれば、もう少し高くなるのではないかと思われる。

泉：まずアンケート結果への印象から述べると、入学の意図が「外国語が上手になりたい」ということから「地域研究をやりたい」へと大分変わってきたといえる。外国語学部が意図しているのは「語学教育だけではないんだ」ということで、この点をいろいろな方法で外部に知らせる努力をしてきた成果が多少出てきたかな、という感じを受けた。このような志望者がもっと多くなるとよいと思うが、問題はこのような希望を抱いて入学した学生に教員としてどれだけ応えているかだ。

教育面からみると、ロシア語学科の清水さんが指摘したように、語学の習得であつぱあつぱしちゃって地域研究や言語研究まで頭が回らないという状況がある。英語学科の場合には、逆に何となく時間を過ごすうちに卒業してしまうといった悩みも聞いたわけだが、新しい言語から始める場合には、言葉の習得に手間取り、自分の関心領域までもっていくのが大変で、そのうちにくたびれてしまうといった状況がみられる。

ただ地域研究をするには、その対象領域の言語がきちんと出来ていなければならないわけで、そのためには時間をかけなければならない。まさに

これは外国語学部における教育上の矛盾といえる。この矛盾を抱えっぱなしで、どのように解決したらよいのかは、未だ解決の道は見つかっていない。私たち教員は、この辺をどうしたらよいのかを真剣に考えなければいけないわけで、反省点にもなっている。

つぎにアンケートの中で実践的知識への希望がかなり強く出ていたが、大学教育のポイントのひとつには広い教養、広い判断力の養成がある。大学の使命というのは、実践的な知識を含んでの上だが、ただ単にノウハウだけを教えるところではない。例えば、こうすれば石はきれいに丸く削れるといったノウハウを教えるだけではなくて、丸くなる石の素材や丸くすることの意味を考えると、そしてそうした行為全体を判断することを大学では重視していくべきではないか、と思う。この点は社会経験をもとに話された小田さんの意見に同感だ。

先日、私の友人が院長をしている老人病院に行ったところ、中庭から聞こえてきたのが山形の民謡、花笠音頭だった。記憶が悪くなったりボケ症状が出てきた年寄りの機能回復を目的としている老人病院なので、看護婦さんの指導で童謡や民謡など昔馴染んだ歌を歌い、記憶を呼び起こさせようとの試みのひとつで、80歳前後のお年寄りが参加していた。私が教鞭をとっている言語学専攻（大学院）でも言語障害のコースがあるので興味をもったもので、院長に「僕があの年齢になったときに、みんなで歌う歌が花笠音頭だったら僕はどうか」と疑問を呈したしだいだ。

つまりそこには、どういった土壌で育ってきたのか、といった文化の問題が絡んでくる。僕たちの世代だったら「なんだろう、ビートルズかな」「花笠音頭だったら僕は遠慮するな」と言ったんだが、このように考えてくると、福祉の問題一つにしても、文化の問題が絡んでくる。しかも日本人だからといっても若い世代は安室奈美恵などが良かったりして、日本の中でも多文化現象が起こってきている。さらにこれからは様々な文化が入ってきて、「多言語・多文化の時代」が到来すると思うが、いずれにしろ文化の問題を無視しては医療ひとつできない。すなわち老人のケアひとつとっても、文化の問題を抜きに考えることができないことを、その病院で目の当たりにしたわけだ。

技術的なノウハウだけでなく、私たちを支えている文化的な要素をきちんと考えた上でなければ実践的なこともできないということだ。大学がす

べきことは、そういう根っこの部分だと私は思っている。後のところは実際に社会に出てから考えていけばよい。こういった点で外国語学部は、学生や社会の期待に応えているかどうか、となると自信があるとは言い難い。

と言うのも、私の出身学部である経済学部の場合には、経済原論、そのもとになる統計学や経済学史、経済史、経済政策といったようにカリキュラムが概ね決まっており、これらをこなすと「経済学」というディシプリンは一応分かる。ところが外国語学部のディシプリンは、これこれをするとかこれだけ達成できると言えるものではない。つまり経済学だとか言語学や社会学、文学といった様々な専門分野が寄り集まって「地域研究」と言ったディシプリンを形成しており、これまでのディシプリンとは非常に違う。しかも寄り集まった専門分野の間のつながり方や結びつきに関する成果はまだ出来上がっていない。個々の研究はあっても、全体として「これが地域研究だ」と言い得るものはまだ出てきていない段階で、外国語学部自体が模索中といえる。

そういう段階のところに学生が入ってくるわけだ。ここで重要なのは、学生にもそういう作業に参加してもらうことで、外国語学部の新たな出発点を担う気概で入学してもらえれば、非常によい学部になり得るのではないか。そのためには学生一人ひとりが、自分の目的とか、問題意識、さらにはその問題を解くには何を学んだらよいのか、といった点に明確な意識をもつことを期待したい。

もっとも学生の方から見るとすでに指摘があったように、教員とのつながりが少ないといった様々な問題があるわけで、教員が研究した成果を学生に伝え、教員と学生が一体となって新しい分野を切り開くといったことが出来るための機構改革なども考えていかなければならない。

堀坂：アンケート結果に表れた実用・実践的な知識をといった学生の要望と、学問を教え学ぶところだとする大学の学問性との間に大きな食い違いがあるように思えるが、大学で学んだことは実際の商社活動にほとんど役立たなかったと発言した小田さんは、今急速に変わりつつある日本の社会において、外国語学部のニーズはいったいどこにあると思われるのか。

小田：私が「実用的・実践的でない」と言った際には、「直接的に」という形容詞をつけていた点を忘れないでいただきたい。すなわち外国語学

部の授業内容がそのまま商社のビジネスに役立つことはないという意味で申し上げたのだ。しかしひとつの商売を進め契約を取る際には、例えば相手がラテンアメリカの人だとすると、その人たちと付き合う時にはその背景をいかに知っているかといった深い知識が問われる。取り引きを進めるうえで全世界的な枠組みがどうなっているのか、といったことを考える必要も出てくる。こういった大きな枠で考えると、学部で学んだことがじわじわと効いてくるわけで、大変に役立ったということができる。

清水（康）：今の話を聞いて前々から考えていたことを言わせてもらくと、外国語学部が作り出さなければいけない人材というか、求められているものは、異文化コミュニケーションの場で中核的な役割を果たせる人材の育成であると思う。ビジネスのためだけではなく、国際的な文化交流を実現できる人であったり、どこかの国、私の場合にはブラジルに興味があるので、ブラジルとの架け橋になれる人、そういった人材育成が社会的に見て外国語学部に求められているのではないかな。

河崎：今、話題となっている役に立つかどうかということなんだが、これは上智大学だけの問題ではなくて、教育界全体の問題でもある。立花隆が『文芸春秋』に東大論を連載しているが、そのなかで「教養」について言及している。「教養」はなかなか一律には定義できないと前置きをした上で、それは直接には役立たないが、ある何らかのことについて口角泡を飛ばして議論できるような、そういった素養が一種の教養ではないか、と言っていた。

役に立つ、役に立たないといった議論はそれこそドイツにおいても大学が存在を始めた時からあるわけで、ドイツに照らして言えば、法律とか経済とか直接役に立つ学科が一方にある。それは国家で言えばエリート養成の学科であるが、他方にフンボルトの精神で幅広い人間的教養を求めている人たちがいる。哲学であるとか精神科学であるとかといった分野だが、どちらが良いのかということはなかなか難しい。確かに実用的であることは魅力的だが、その一方で昔のイギリス貴族風に「役に立つことをやるなんて馬鹿らしいじゃないか」という意見もあって、大学にいる時にこそ役に立たない、つまりパンとは関係ないことをやろうじゃないかというようなこともあるわけだ。

外国語学部は、文学部に比べると実用的に使える外国語をとということで

始まったのだが、そうなると今度は「語学学校とどう違うんだ」といった議論が生じ、学問的な方向にシフトをせざるをえなくなった。学問的なものは、今の議論で言えば役に立たないものの範疇に入るのかも知れない。直接パンには役に立たない、お金稼ぎにはならないが、人生においては何らかのプラスにはなるのではないか。今の外国語学部はそういった方向を意識し出している、と私はみている。

役に立つに越したことはないが、かといって役に立たないことをやるのが全く意味がないとは私は思わない。むしろ役に立たないことに意味を見出すことこそ学生時代なのではないか。それは学生一人ひとりの人生観にかかわってくることで、私たち教員とそういうことを一緒に考えていってもらえればと思う。

堀坂：新しい言語をABCから習得することはなかなか厳しいものがある。そうした過程を経て、本日話題に上ってきた教員と学生間の関係が形成されるのではないかと思うのだが。

清水（葉）：ロシア語学科も小人数なので、会話の授業は先生1人に学生10人ちょっとといった比率になる。その意味では教員と学生の関係は非常に近いといえる。しかも授業が非常に厳しいこともあって、5月ごろになると自分がしていることに疑問が出てきたりして特定の親しい先生のところへ相談に行くということもある。交流がすごくあるともいえるのだが、学年が上がるに従って特定の学生だけが教員とのコミュニケーションを維持し、その一方で学科の勉強をさらっと流すだけ、あるいは教員には全く近寄らない人も出てくる。その傾向は学年を追うごとにはっきりしてくる。

堀坂：そういった状況で教員は何をしたらよいのだろうか。

萱：英語学科の場合は、他学科よりも人数が多く、語学科目でも最低で20人くらい、多いと40人くらいになる。週1、2回は先生と顔を合わせてはいるが、個人的な付き合いまではなかなかいかない。院生になって先生の研究室に行くことが増えたが、先生を訪ねる学生の姿を見掛けることはほとんどない。書類を書いてもらうとか何か頼み事をするとか、事務的な用事が大半だ。先生に悩みの相談を持ち掛けるとかいった人間的な関係はあまりないような気がする。先生の中にはプライベートな領域だからとのことで、そういう関係を好まない方もいる。先生と一緒に飲みに行くとか

昼食をとるなどして勉強外のことを話せば、学生・教員間の距離が縮まり学習効果も上がるのではないかと思う。

堀坂：泉先生から先ほど、外国語学部の研究領域は発展過程にあって学生にも参加して欲しいとの発言があったが、フロアから「受動的な授業が多いという指摘は的を得ていると思う。日本語でさえ自分の言いたいことがうまく言えない場合があるのに、外国語でそれができるようになるのかと不安になる。プレゼンテーションやディベート等の参加形式で自分の思考能力を鍛えられるような授業を受けたい。1、2年のうちは日本語で行うなどの工夫も必要だと思うが、外国語ができることと、それを使って何かができるということは別であるような気がする」という意見が出ているが。

井上：まさにそういった分野をもっと推し進める必要があると私もつねづね思っている。その話に入る前に「最高の教師は何か」と考えてみると、結局、個人個人の経験に尽きるということを申し上げたい。私の好きな言葉で、イギリス映画のShadowlandの中でオックスフォードの先生が言う台詞に「経験とは過酷な教師なり」というひと言がある。映画の中で主人公は、実に雄弁に愛や死について講義をしている。ところが自分自身は母親の死に直面して以降は、絶対に人を愛することを拒んでいる。自分の心をさらけ出し傷つくことを恐れている。が、老年にさしかかった頃に恋をしてしまい、しかもその恋人にも先立たれる。その時に彼が発した台詞が「経験とは過酷な教師なり」だった。

私自身、一生懸命コミュニケーションを勉強して人に教えても、現実には特定の人たちとのコミュニケーションができずに悲しくて悔しくてどうしようもないことがある。のたうち回るような苦しみ この経験が私にとってやはり最高の教師であって、それでもめげずにまたやろうという気になる。結局のところ大学では、学生はいろんな授業を受けても疑似体験しかできないわけだが、それでもするとしないとでは大きく違う。教員の話聞いても自分が体験していないから本当の意味でドシンとくるものはないかも知れない。しかし半分でも感動したりするとそれが底力となって、自分が過酷な経験をした時には簡単にはへこたれないし、もう一回チャレンジしようという気にもなる。

プレゼンテーションやディベートはもっと取り入れる必要がある。なぜ

ならばその場で恥ずかしい思いをしたりつらい思いをすることが、過酷な経験となって卒業してから経験するであろう何倍も苦しいことに立ち向かえると考えるからだ。苦しんだ人はそれだけ喜びも大きい。和気あいあいも良いが、社会に出れば和気あいあいだけでは済まないのが人生だ。学生の方も「ないから駄目」と諦めるのではなくて、学外のシンポジウムに出席するなど率先して自分で力をつける機会を見つけていくようにしなければ。単位になる、ならないや、成績がAかどうかではなく、自分に力をつけるかどうかの問題だ。それこそ社会に出てからの即戦力になると言える。ぜひとも実行して欲しい。

堀坂：泉先生は以前に研究者としての教師像を見て欲しいということ言われていたが。

泉：大学の教員は、教育者であると同時に研究者でもある。ただ研究の成果は、学生との関係では授業で出していく方法しかあり得ないのだが、実際には授業で出すのはほんの一部であって、研究発表はそれ以外の、例えば学会とか文章の形でしている。このため学生の目にはほとんど触れない。だから当然のことながら、学生からみた教員の評価は教壇に立っている教員にしかありえないのだが、教員から見るとちょっと不満なところがある。私たちの仕事は、教室外のものが非常に多い。それをもっと学生に見て欲しいと思うわけだ。

その場合、どのような方法で学生に見てもらえるかとなると、結局は、先ほど出てきた教員と学生の触れ合いということに還元される。ただここで考えて欲しいのは、私もゼミを持っているが、ゼミ後に飲みに行くとか人生相談といった私生活的な面ももちろん意味はあるが、基本的には大学の教員と学生の付き合いは、研究であるとか学問であるべきである。もし教室での私の話に興味を持ったのならば、研究室に来て専門書の紹介や研究の内容について聞き出してもらいたい。先ほども言ったように、時には「あっ」というような発想を学生が持っている場合もある。つまり知識としては教員の方がすぐれており、それをどのように組み立てるか知っているけれども、発想の面では、まだ組み立て方を持っていない学生の方がキラッと光るものを持っている場合がある。もし私たちに話しかけてくれれば十分にアドバイスできるケースがある。そういったところに学生と教員の付き合いの基本があって、飲みに行くといったことはその次で

はないかと思う。

堀坂：フロアのおそらく高校生の方の質問だと思われるが、「地域研究を学ぶことの意味」「実用的・実践的なものを学ぶ上での専門学校と大学との違いは何か」との質問が寄せられているが。

井上：地域研究を学ぶメリットとして、私は異文化間コミュニケーションをより効果的なものにするためという点を強調したい。もちろん個人的な興味や純粋に研究上の関心から特定の地域の研究をする人もいる。しかし語学を学ぶ者はすべて地域研究を学ばなければならないと私は思う。しかもある特定地域だけに限定しては本当はいけない。英語学科の学生を想定すると、英語を使う地域は実にたくさんある。通訳をしていて分かることだが、英語圏ではない人も英語を使っており、英語を媒体としてコミュニケーションをしている。英語の通訳を間に入れることによって異なる言語間の媒介をする場合もある。まさしく「国際語」という観点が必要になる。

その場合には、対象地域がものすごく広がってくる。フランス語訛りで英語を話している人は、英語で話してはいるが、それを理解するにはフランス語圏地域に関する知識が必要となる。物事の考え方、perceptionへの理解が重要で、ものの見方、感じ方、語感が大切となる。同じ英語でもフランス人が話す英語とアメリカ人の話す英語の背景には、発想の違いや表現の違いも含まれる。訛りの問題だけではないのであって、そういった観点から勉強しておく、実際に自分が学外に出て異文化間コミュニケーションする際に役に立つ。地域研究なくして効果的なコミュニケーションはできない、とも言える。

清水(康)：僕はポルトガル語を専攻しているが、例えばサッカーに興味を持ったら当然そのことをさらに深く知りたいと思う。それが動機となってポルトガル語の勉強もしなければならないと思うようになる。その逆もあり得るわけだが、言語を学ぶ上での動機づけとして重要といえる。ブラジル人との会話を考えた場合にも、ポルトガル語だけではだめで、相手の国の文化を知らなくて交流なんてできない。当然、日本の文化についてもある程度の知識を持っていなければならないわけだが、相手の文化も知り、その言語がどういう文化に基づいてできてきたものかを理解するようになるとコミュニケーションして楽しくなる。だから地域研究が好きだ。

小田：今、二人の方が言われた点はまさにその通りだと思うが、「地域研究」には二つの側面がある点を指摘しておきたい。ひとつは政策科学としての側面で、国家の政策と密着した形での地域研究である。例えて言えば中東での危機発生予測とか、ラテンアメリカの現状分析といった形の研究である。もう一つは文化科学としての側面だ。「地域」を定義すること自体大変難しいことだが、固有の地域の尊厳を見出す研究で、本学からもすばらしい成果が生み出されている。アジア文化研究所やイベロアメリカ研究所の研究がその一端といえる。様々な専門分野を駆使しながら、何とか「地域」を理解をしていこうとする文化研究である。

泉：地域研究は、「地域」のことをよく知るといこと、そしてそれを超えてさらに主体的に私たちがその「地域」とどういう関わりを持ったらいいかを考えるよすがにすることが大切だ。相手を知らずして私たちは「地域」との関わりを持つことはできない。ただ日本には経済的な利益の対象としてしか「地域」を見ないという傾向が強いが、そういう形ではなく、その「地域」をそっくりそのまま理解する必要があるし、それがその「地域」との関わり方の前提であるということができよう。

それからもう一つ、「地域」の研究をすることが一般性へのつながりにもなり得るといことを申し上げたい。例えば私の専門の言語でみると、ベルギーには国内に言語戦争がある。オランダ語地域とフランス語地域があり、オランダ語地域の住民はフランス語をうんと勉強した。それに対しフランス語地域の住人はあまり勉強しなかった。その背景には経済格差があってフランス語地域の方が経済的に豊かだったことがあった。ところが今の経済状況は逆転しつつあり、そうなる途端にオランダ語地域の住人はフランス語を前ほど熱心に学ばなくなってしまった。カナダにも同様のケースがある。ケベック州は今はフランス語を州の言語にしているが、以前は英語ができないといろいろ不利になるので非常に熱心に勉強せざるをえなかった。ケベックが今ようになった事情のうしろには、やはりケベックの経済的な発展がある。

このように「地域」をいくつも見てくると、経済的な状況と言語習得の問題の関連性が見えてくる。「地域」から広い世界に出ることだってある。それもまた地域研究の一つのあり方だ。

堀坂：次の質問は卒業生からで「副専攻を学科に格上げしてはどうか」

とのコメントだが。

泉：私は言語学副専攻の主任をしているのでその立場から回答すると、確かに今の副専攻は、言語学副専攻にしる国際関係やアジア文化副専攻しる、学科になり得る内容を持っているが、「副専攻」という形での利点もまたある。というのも「副専攻」であるということで各学科に所属している学生たちが共通に授業を受けることができるわけで、一つの学科にした途端に「学科」という枠ができてしまい、その学科の学生専門の講義内容という形になりやすい。学科の形を取らずに学部全体、大学全体に開放している今のあり方には、それなりの利点があると考えていただきたい。

堀坂：今度は在学生からの質問だ。「4年という期間は非常に短く、語学にしる地域研究にしる中途半端になりがちだ。4年生の大半が自分の成果に厳しい評価をしているのはうなずける。また地域研究が学問として確立しておらず、しかもインターディシプリンという性格もあり、つまみ食いになってしまうのではないかという危惧もある。ABCから学ぶ言語だと、まるで小学生レベルと感ずることもあり、他学部と比べあせることもあった。一年生の時点でも語学だけに集中するのではなく、もっと専門的な授業を受けられるように工夫して欲しい。加えて言えば、入門的講義はあまり役に立たない。たった数回の授業でその学問分野について学生に興味を持たせることができるとは思わない」という意見だが。

萱：学生がどういうニーズを持っているのか、教員の側が十分に把握していないという問題がある。要するに学生・教員間の話し合いの機会を増やし、学生が一体何を求めているのか、教師としては何を与えられるのかを十分に意見交換していけばよいように思う。

小田：私の思うところは、外国語学部を早く「外国研究学部」に改組する必要があるということだ。外国語学部は外国語のみを勉強するところではなく、外国語を一つの道具として何かをやっていこうというところに主眼があるのではないか。もちろん言語習得は大事なことだが、それを武器にしながらかができるかを問う学部であり、しかもそれは大学を出てからも十分に通用するものでなければならないと思う。

河崎：「中途半端に終わってしまう」という意見があったが、それは当たり前なわけで在学中にはアルバイトやサークルなどやりたいことがある

いるあって、語学だけをやっているわけではない。しかも英語以外の言語の場合は新しく始めるわけだから、3、4年で完璧にしろという方がどだい無理な話だ。先ほど述べたように、長い人生の中での新しい言語に付き合う入り口なわけだ。基礎的な語学力をつけたら、あとはどう使うかは各人しだいで、本当に自分のものにしていくかどうかはその後にかかっている。「中途半端」と言うとネガティブだけど、「発展途上」ということでいろいろな機会を見つけて使い、伸ばしていく。一生付き合っていくお友達と思って育てていってもらいたい。

それから地域研究についてだが、この言葉はひところの「国際関係」のように魔法のような響きを持ってきている。ディシプリンとしての確立はさておき、地域研究と言っても何も地域全体を研究しなければいけないということではない。日本のことだって全体を理解するなんて不可能なことなのに、ドイツの地域全体を知ろうと言うのは無理がある。「地域研究」というと構えてしまうが、例えば音楽に関心があれば音楽でもよいし、政治に関心があれば政治でもいい。関心分野をいろいろつまみ食いできるところが地域研究の一つの特色なんじゃないかな。幕の内弁当みたいなのが魅力であって、どういった部分を地域研究の中から引っ張り出していくかということは、それぞれ各人に任せられている。このような形で外国を対象とした地域研究を通じて、逆に日本に照射してみるような作業ができればよい、とも考えている。ドイツの政治の逆照射としての日本の政治をといった具合に。

井上：1、2年生の時には取らねばならない、やらねばならないというねばならぬが多くて大変苦しんでいる学生も少なくないと思うが、そういう時期は仕方がないと割り切って基礎をしっかりと身につけることが大事だ。それが結局底力になって、その後自分のしたいことの戦力につながってくる。高学年になって選択していけるようになると、自分がどのような知力をつけたいかがポイントになる。その際に大切なのは、単位や成績が取り易いといったことではなく、体感できる身体で感じることができる授業を率先して取ること。そういった方法で過酷な経験に備えて欲しい。

清水(葉)：フロアからの意見に「入門授業は必要ないのではないか」というのがあったが、私はまるで逆で、自分の興味分野を探していくうえで1、2年のうちに教員の幅広い知識を聞いて判断することが大切で、「入

門」とつく授業は非常に有効といえる。

清水（康）：本日の話のなかで教員と学生の関係があまりよくないのでという話があったが、僕の所属している学科の場合はかなり良好だと思っている。それには教員が課外活動に参加してくれる、学生に話しかけてくれるといったことや、学科室が交流の場になっているということがある。そういう関係を通じて教員の仕事や研究、著書を知る機会も少なくない。また学科行事のひとつに在日ブラジル人やポルトガル人を交えたものがあり、1年生はそこで初めてネイティブ教員以外の外国人に出会う。そういったところから実践的なコミュニケーションの場を知ることができるし、自分が何をすればよいのかもだに見えてくる。

堀坂：最後に司会として一言申し上げると、日本をめぐる環境がいま急速に変化しつつある中で、大学も自分自身を見詰めなくてはならなくなり、自己点検・自己評価というような形でいろいろな作業をしている。今回のアンケートも自己点検・自己評価の一つと言うこともできよう。学生による評価をしてもらったということにもなるわけで、私たちはこうしたデータをいろいろな形で活用していく必要がある。教授会での議論やカリキュラム編成への利用を通じて自分たち自身も変えていく、それが基本ではないかと思う。引き続きこういう形での議論を積み重ねていくことによって、教員と学生がだんだんと共通した一つの目的を持っていくようになり、そうした過程を経て外国研究、地域研究といった発展過程にある新しい学問形成の共同作業ができれば素晴らしいことだと申し上げて、シンポジウムを締めくくりたいと思う。